

【(後期開講) 講義の受講に係ることは、下部の申し込みフォームまたは、QRコードに入力されたメールアドレスにお知らせします。】

No	講義日	講時	担当者	所属等	講義題目	講義概要
1	10月6日(水)	13:00~14:30	日笠 健一	学際高等研究教育院長	講義ガイダンス 自然界の基礎法則と物理量の次元と単位	「合同講義」開設の由来、「合同講義」の意義及び学際高等研究教育院の理念・使命について解説するとともに、講義の進行について、講義の受け方や感想文の提出など成績評価について解説します。 長さ、時間、質量などの物理量は、それぞれの単位の何倍であるかということによって表されます。国際的に使用されている単位系(SI)の定義は、昨年から全く新しい定義となりました。これは、自然界の基礎法則(相対性理論、量子力学、統計力学)に基づいた定義です。これら基礎法則は、独立な次元がいくつかあるかという問題を概念的に変えるものでもあります。このような単位の新しい定義と、その基礎となる哲学、測定技術などについて紹介・議論します。
2	10月13日(水)	13:00~14:30	滝澤 博胤	理事・副学長(教育・学生支援)	ケミストリーの場を探る	“chemistry”は、「化合する」、「相性・調和によって引き出される効果」を意味する言葉である。化学反応は、2種類以上の物質間のケミストリーによって性質の異なる化合物を合成するプロセスであるが、その化学反応の「場」を操ることで、新たな機能をもった新物質を誕生させることができる。周期表を眺めながら元素の組み合わせを選び、所望の結合状態、原子配列を実現するためには、ケミストリーの「場」の選択が極めて重要である。本講義では、元素戦略に基づく機能材料設計や、カーボン・ニュートラルの実現に資する新たな化学プロセスの開拓など、化学反応の場に着目した材料プロセスを展望したい。
4	10月20日(水)	13:00~14:30	栗原 和枝	未来科学技術共同研究センター教授	トライボロジー融合研究:分子間力から摩擦力まで	摩擦を研究する分野をトライボロジーと言う。摩擦は動く機材、そして多くは潤滑油なども関わる複雑な現象のため、現象の解明は十分に進んでいない。摩擦や摩擦などの制御によるトライボロジー技術の経済効果は、省エネルギー、機械の信頼性や寿命の向上などから非常に大きく、GDPの2%にも及ぶと推定され、その解明が望まれていた。 最近、ナノ界面科学の進歩により現象解明の可能性が見えてきたこと、また省エネルギーやイノベーションなどの社会的課題からの要請が大きくなったことから、摩擦現象を解明し、新しい技術展開を目指すという動きが活発になっている。これには、機械、材料、計測、シミュレーションといった広範な融合研究が必要である。本講義では、先端的なトライボロジーの融合研究について、基盤となる研究方法も含め、背景や最近の展開を含め解説する。
3	10月27日(水)	13:00~14:30	大野 英男	総長	スピントロニクスを用いた省エネルギー集積回路	電子の電荷とスピンを使うスピントロニクスにより、極めて省エネルギーの集積回路が実現できます。この省エネルギー集積回路にまつわる材料、物理、素子、回路について俯瞰すると共に、世界のトレンドを決めるダイナミズムとそれがもたらす社会的インパクトについて考えます。
5	11月10日(水)	13:00~14:30	阿尻 雅文	材料科学高等研究所教授	Mixing Unmixable	異なる発想・文化の融合こそが新たなものを生み出すのだと思う。講演者が開発してきた超臨界流体反応技術や現在すすめているナノ材料プロセス・サイエンスプロジェクトを例に挙げつつ、その重要性について考えてみたい。「融合」の重要性は、自然科学や技術の中だけの問題ではなく、学術と社会についても同様である。従来、科学技術はEfficiencyの最大化を目指してきたが、社会・市民の幸福・満足、Sufficiencyを最大化するための科学技術の在り方を考えていかなければならないと感じている。そこには、人文社会科学と自然科学との融合はもたらん、社会・市民と学術が融合し未来づくりをしていく新たな方向性があるように思う。
6	11月17日(水)	13:00~14:30	今村 文彦	災害科学国際研究所長	災害科学国際研究所の発足と現在の活動 今後のリスクとレジリエント社会構築に向けて	東日本大震災の1年後に東北大学に災害科学国際研究所が発足し、当時の課題を解決するべく文理融合の英知を結集し、得られた知見をベースに自然災害科学に関する世界最先端の研究を強力に推進する組織を立ち上げた。すでに、2015年国連防災世界会議での活躍、2017年第一回世界防災フォーラムの開催など、その活動は学術を越えて世界社会への貢献を目指している。この組織では、どのような学際連携の取組が生まれ、どのようにその成果を復興支援や今後の防災活動として貢献活動を展開しているのか紹介したい。今回、高度化シミュレーションで解析されたところがある、その大規模地震や津波の実態を見て頂き、なぜあれだけの災害が生じたのか?その上で、我々は今後何をすべきなのか考えていただきたい。後半は、2017年6月に指定国立大学の指定に伴って発足した災害科学世界トップレベル研究拠点の動きを紹介したい。災害対応サイクリカル理論を適用することで4つの科学分野を融合させ、学内の学際連携を基盤とした「災害科学」の学際研究領域を創成することを目的とする。現在は自然災害、地球規模気候変動に加えて大規模感染症などが深刻であり様々なリスクが生じている。これらに対して対応力と回復力のあるレジリエント社会構築の必要性が叫ばれている。この中、環太平洋大学協会(APRU)組織などと始まりつつある国際的な災害科学研究ネットワークを発展させ、国際共同研究の強化や国際学術会議の開催を通じて「災害科学」の体系化を図り、世界をリードする研究拠点を目指している。
7	11月24日(水)	13:00~14:30	照井 伸彦	経済学研究科教授	ベイズ統計の理論と実践:スモールデータとビッグデータのモデリング	データが溢れる現代において、データ分析の手法や活用の在り方が大きく変化しています。柔軟な統計モデリングを可能とする分析枠組みをもつベイズ統計は、スモールデータの構造分析による集団の中の個性(異質性)を捉える手法として注目されています。この講義では、計算機性能向上と積算アルゴリズムの普及と進化により1990年代後半から様々な分野で応用されてきました。さらに現代では、逆問題の理論を展開する機能をもつベイズ統計は、ビッグデータ分析での機械学習やAIの要素技術となっています。 本講義では、IoT社会で求められるデータ分析手法として、ベイズ統計の理論と応用について講義します。項目として、ベイズ統計の理論、ベイズ統計の計算アルゴリズム、異質性のモデル、逆問題と因果推論、機械学習・AIとベイズ統計などを取り上げます。
8	12月1日(水)	13:00~14:30	井上 邦雄	ニュートリノ科学研究センター長	宇宙・素粒子の謎を解く鍵:ニュートリノ	物質を構成する素粒子の一種であるニュートリノは馴染みある電子などの素粒子と比べて桁違いに多く宇宙に存在します。太陽や地球などの天体からも大量に放出されていますが、天体のような大きな物質でも簡単にすり抜けてしまうため身近に感じることが難しい素粒子です。大型の観測装置の進歩によってニュートリノ観測が実現し、ニュートリノの性質の理解が進んだため、ニュートリノの透過性を利用して天体内部の研究が可能になりました。一方、ニュートリノだけが持つ特別な性質が、宇宙に反物質が無く物質だけで作られていることを説明すると考えられています。この性質の究明にも、ニュートリノ観測装置の特殊な環境が利用できます。ニュートリノを利用した天体内部の観測や、宇宙物質優勢の謎への挑戦を紹介いたします。
9	12月8日(水)	13:00~14:30	中沢 正隆	電気通信研究機構特任教授	光ファイバ通信の現状と将来展望	光ファイバは髪の毛のように細いガラスから出来ているが、その中心にあるコアに光を閉じこめて、大量の情報を高速に長距離伝送している。伝送速度は1秒間に100テラビット、伝送距離は1万kmに達し、グローバルネットワークを実現している。この講義では光通信システムを構成する光源・変調器・ファイバ・受光器などの各種光デバイス技術を簡単に説明したうえで、今日の多様な光伝送技術について紹介する。さらに、我々が世界に先駆けて挑戦している革新的な光伝送技術および無線通信との融合を目指したBeyond 5G技術について講義する。
10	12月15日(水)	13:00~14:30	山本 雅之	医学系研究科教授 東北大学 東北メディカル・メガバンク機構長	酸素と医学	酸素は細胞の火を燃やすと共に、私たちの体を生きながらえさせる重要な環境因子である。酸素は、私たちの体が効率的にエネルギーを獲得することを保証するが、一方、過剰な酸素は私たちの体を錆びさせていく。近年に至り、ようやく、酸素濃度の変化に反応して、体を守る仕組みの分子基盤が解明されつつある。本講義では、酸化ストレスから体を守るKEAP1-NRF2制御系の脱抑制制御の様子と、低酸素に反応して体を守るERK1/2制御系の発現制御の様子を紹介する。学生諸君に「酸素生物学」の興味深い世界を実感して頂くと共に、さらなる論文講読のガイドを提供したい。
11	12月22日(水)	13:00~14:30	早瀬 敏幸	学際科学フロンティア研究所長	実世界の流れを再現する —コンピュータシミュレーションの新たな展開—	流れは、呼吸や血流などの生命維持から、室内環境、輸送機器や大規模プラントなどの人工物、大気や海流などの地球環境にわたる幅広い分野の問題に関わっている。特に医療診断や流れの制御、気象予測など、実世界の流れを正確かつ詳細に知ることが必要な問題は多い。計測はそのための最も直接的な方法であるが、時間的・空間的に広がりをもつ流れの状態を完全に計測することは困難である。一方でコンピュータシミュレーションによる流れのシミュレーションは、正確な初期値や境界条件が一般的に未知であり、実世界の流れを正確に再現することは難しい。このように計測やシミュレーション単独では解決が困難な問題を、両手法の融合により解決しようとする研究が近年様々な分野で活発に行われている。本講義では、計測と融合した新たなシミュレーション手法について説明し、種々の流れ解析への適用例について述べる。
12	1月5日(水)	13:00~14:30	寺田 眞浩	理学部・理学研究科長	欲しいものだけを作る化学:有機合成化学とデータ科学の融合	有機化学反応によって欲しいものだけを選択的に合成することは環境負荷軽減の観点からも強く望まれていますが、実際はそれほど簡単なことではありません。この講義では選択的に有機化合物を得る手法の中でも最も高度な方法論である、鏡像異性体の作り分けを触媒によって行う触媒の不斉合成法を紹介いたします。優れた触媒の不斉合成法を確立するために、従来の方法では多くの実験を経て望む鏡像異性体を得る方法を試行錯誤のもとに見つけ出すのが主流でした。こうしたいわゆる科学者の直観に基づいて成り立っていた従来のモノづくりから脱却することを目指し、理論科学計算の手法を用いたデータ科学によって論理的に触媒の分子設計指針を導き出すことができないか、検討を進めています。この講義では、実験化学とデータ科学の融合を目指して進めている最先端研究を紹介いたします。
13	1月12日(水)	13:00~14:30	押谷 仁	医学系研究科教授	COVID-19とScience	COVID-19に対しては世界各国で莫大な研究費が投じられ、急速に科学的知見が蓄積されている。治療薬やワクチン開発に関しても新たな科学的知見が生かされ非常に速いスピードで実用化されている。特にmRNAワクチンの開発・実用化はCOVID-19対策上大きなステップであった。しかし、治療薬やワクチンについてもさまざまな課題があり、完全な問題解決には至っていない。また科学的知見に基づかない政策決定も世界各国で行われてきている。国内ではこのようなパンデミックに対して十分な研究体制が確立しないうちにパンデミックを迎えたことで多くの課題が明らかになった。特に臨床研究や疫学研究の体制が十分に整備できていなかったことが科学的貢献という点では多くの国に後れを取る原因となっている。さらに、COVID-19の問題はもはやウイルス学や疫学といった領域の研究だけでは解決しない問題になっている。COVID-19の問題を考えるためには、人文・社会学系との共同研究を含めた真の学際的な研究が必要である。この講義では、COVID-19のパンデミックを通して見えてきた科学の課題について考えていきたい。
14	1月19日(水)	13:00~14:30	大隅 典子	医学系研究科教授 副学長(広報・共同参画)	<個性>を科学する!	人間の「個性」は、身長、体重、髪の色や目の色のような身体的なものだけではなく、認知的能力やパーソナリティなど、脳神経系の機能に大きく関係する。心理学では、こうした認知的能力やパーソナリティの個人差について、知覚現象などに代表されるヒトとしての心的機能の共通性と合わせて、個性性(「個性」)を法則的に理解することを試みてきた。しかし、ヒトの心的(認知的)機能の共通性については、関連する神経科学的研究との連携によってかなりのことが解明されてきたにもかかわらず、心的機能の個人差、すなわち「個性」の問題については現象の記述的説明レベルにとどまっており、その神経生物学的基盤については未だ十分に明らかになっていない。近年の主に動物を対象にした進化心理学的アプローチによる「個体差」の研究では、行動面の「個性」は単にランダムなばらつきではなく、環境への適応の一つとして機能していることが示唆されている。したがって、人間の「個性」も単なる「個人差」ではなく、進化の過程で形成された形質の表れと考えることにより、何らかの法則性がその背後に存在することが想定できる。一方で、規則性に基づいた多様性は、個人ごとに育まれて、多岐にわたる発達上の道筋を生み出すと考えられる。いわゆる「定型発達」と「非定型発達」は、このような道筋の幅のなかで捉え直すことが重要であり、乳幼児期から青年期に発達した個性は、種に普遍的な特徴とともに次世代へ継承される部分があると予想する。 本講義では、2016年より立ち上げた新学術領域「多様な個性」を創発する脳システム統合的理論」という学際的なグループ研究についても紹介しつつ、平均値で語れない科学へのチャレンジについて聴講生とともにディスカッションしたい。 【参考サイト】 新学術領域HP: http://www.koseisouhatsu.jp/ 大隅研HP: http://www.dev-neurobio.med.tohoku.ac.jp/
15	1月26日(水)	13:00~14:30	佐藤 嘉倫	文学研究科教授	信頼関係はいかにして成立するのか	私たちは他人を信頼したり他人から信頼されたりして日常生活を送っている。朝起きてバスに乗って大学に来て講義に出席するというありきたりの行動を例にとろう。この場合、バスの運転手が自分の降りる停留所までバスを運転してくれると信頼し、講義を担当する教員が教室に来て講義をしてくれると信頼している。しかしよく考えると、人を信頼することはリスクを伴う行為である。人を信頼してその人が信頼にこたえてくれるならば、現状よりも良いことが起こる。しかし裏切られるならば、現状よりも悪くなる。また信頼関係が成立するためには、自分が他人を信頼するだけでなく、その他人が自分を信頼してくれないといけない。このように人を信頼することや信頼関係が成立することの背景には、かなり複雑な社会的メカニズムが存在している。本講義では、数値モデルやコンピュータ・シミュレーションによってこのメカニズムの解明を行う。

【備考:毎週水曜3講時】

【留意事項】

- 以下の申し込みフォームまたは、QRコードから9月30日(木)までにお申し込みください。
<https://forms.gle/HrWQWH1m6PC4A9I9>
- 講義は、Zoomで行います。
- 受講に係ることは、申し込みの際に入力されたメールアドレスにお知らせします。
- 履修登録は忘れずに行ってください。

